

再開第4回 (通算第33回) 文化大学のお知らせ

令和5年 2月26日(日) 15~17時開催

・講師 菊地 隆雄 (きくち・たかお) さん

1950年高島町屋代生まれ。米沢興譲館高等学校卒業。大東文化大学大学院修士課程(中国文学専攻)修了。都立高校教員として定年まで勤める。

その間、2度にわたり中国の大学(1981~83年大連外国語大学、1986~88年北京首都師範大学)で「外籍文教専門家」

(外国人教官)として日本の近代文学・現代文学を担当する。都立高校教員退職後は2017年まで鶴見大学客員教授(漢文担当)。

教職の傍ら長らく高校の国語教科書(主に漢文)の編修や指導書の執筆に関わり、現在に至っている。2019年から米沢有為会理事(現在に至る)。

主な著書: 『基礎から解釈へ 漢文必携』(共著 桐原書店)

『新書漢文大系 日本漢詩』(編著 明治書院)

『もうひとつの生き方—唐代伝奇小説—』(明治書院)、

『漢詩鑑賞事典』(講談社学術文庫、漢代~初唐の漢詩を担当) など



・演題 「満洲」と米沢有為会 — 宇佐美勝夫の役割 —

<講演要旨>

日本が中国東北部(旧満洲)と本格的な関係を持った期間は、日露戦争後のポーツマス条約締結(1905年9月)から敗戦(1945年8月)までの40年間です。日本はこの条約によってロシアの持っていた権益の、①遼東半島(旅順や大連一帯)の租借権、②東清鉄道南部の旅順—長春間の幹線とその支線及び附属地や撫順・鞍山の鉱区等の租借権を手に入れます。その結果、日本は、①を「関東州」という植民地とし、②を半官半民の「南満洲鉄道株式会社」(「満鉄」という国策会社を造って経営しました。これにしたがって、置賜地区からも軍人や官吏、満鉄の関連企業で働く人々、そしてその人たちの生活を支える建設業者や商業者・教員・医療関係者等が数多く大陸に渡りました。

さらに1931(昭和6)年の満州事変の翌年、「満洲国」ができると、それ以前の職種の人たちばかりではなく、「満蒙開拓団」「満蒙開拓青少年義勇軍」などの人々が満洲の奥地やソ連との国境近くに送り込まれます。置賜地区からもこうして移住した人たちが数多く見られます。

今回は以上を踏まえ、主に次の3分野の人々を取り上げて、「満洲」とは何だったのかを皆さんと一緒に考えたいと思います。宇佐美勝夫は米沢有為会の第5代会長(昭和6~17年在任)。

1、満洲の都市部で生活した人々

主に米沢有為会の会員の活動を扱います。

2、満洲の奥地で生活した人々

置賜地区から移住したある「満蒙開拓団」の実態と敗戦時の状況を扱います。

3、満洲国の中枢に関わった人

満洲国国務顧問であった宇佐美勝夫について、その職に就くまでのいきさつと、国務顧問としての活動や役割を国務総理鄭孝胥の日記に基づいて見てゆきます。